

広島市における感染症発生動向調査結果について (2012年)

生活科学部

はじめに

広島市では、広島市感染症発生動向調査事業実施要綱に基づき、衛生研究所に感染症情報センターを設置し、市域の感染症情報を集計、解析するとともに、その結果をホームページ等により、市民、関係機関等へ提供している。

今回、2012年の広島市における感染症患者発生状況をまとめたので報告する。

方法

1 対象疾患

対象疾患は、国の実施要綱に示されている一類感染症(エボラ出血熱等7疾患)、二類感染症(急性灰白髄炎等5疾患)、三類感染症(コレラ等5疾患)、四類感染症(E型肝炎等42疾患)、全数把握対象の五類感染症(アメーバ赤痢等16疾患)および定点把握対象の五類感染症(インフルエンザ等26疾患)の合わせて101疾患とした。

2 患者情報の収集

全数把握対象の感染症については市内医療機関から、定点把握対象の五類感染症については定点医療機関から週単位または月単位で、各行政区に置かれている保健センターに届出される。各保健センターは、感染症発生動向調査システムにより患者情報を感染症情報センターへ報告し、感染症情報センターでは中央感染症情報センター(国立感染症研究所)へ全市分の患者情報を報告するとともに集計処理を行った。

なお、市内の患者定点の内訳は、インフルエンザ定点(小児科定点を含む)37、小児科定点24、眼科定点8、性感染症定点9、基幹定点7である。

3 対象期間

全数把握対象疾患および月報対象の定点把握対象疾患については、平成24年1月1日～12月31日とし、週報対象の定点把握疾患は、平成24年1月2日～平成24年12月30日(2012年第1週～第52週)とした。

結果

1 全数把握対象疾患

医療機関から届出のあった疾患は、二類感染症

は結核、三類感染症は腸管出血性大腸菌感染症、四類感染症はA型肝炎、つつが虫病、デング熱、日本紅斑熱、レジオネラ症の5疾患、五類感染症はアメーバ赤痢、ウイルス性肝炎、急性脳炎、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、後天性免疫不全症候群、ジアルジア症、梅毒、破傷風、バンコマイシン耐性腸球菌感染症、風しん、麻しんの11疾患で、合わせて18疾患であった。一類感染症については届出がなかった。2012年における各疾患の届出数を表1に示した。比較的届出数の多かった疾患(結核を除く)は次のとおりである。

(1) 腸管出血性大腸菌感染症

14件の届出があり、前年の29件から減少した。すべて散发事例であった。月別では、5月と6月が3件と最も多く、14件すべての届出が5月から11月の7か月間にあった。血清型別では、O157が10件と最も多く、次いでO26が3件であった。年齢別では、例年が多い10歳以下が2件と少なく、65歳以上が5件と36%を占めていた。

(2) A型肝炎

9件の届出があり、全数把握対象疾患となった2004年以降で最も多かった。すべて散发事例であった。月別では、4月が4件と最も多く、4月から6

表1 全数把握対象疾患の届出数(2012年)

類型	疾患名	届出数
二類	結核	280
三類	腸管出血性大腸菌感染症	14
四類	A型肝炎	9
	つつが虫病	5
	デング熱	2
	日本紅斑熱	1
	レジオネラ症	7
五類	アメーバ赤痢	10
	ウイルス性肝炎	7
	急性脳炎	10
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1
	後天性免疫不全症候群	18
	ジアルジア症	1
	梅毒	8
	破傷風	2
バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1	
	風しん	4
	麻しん	4

月に7件と春季に多かった。また、患者の年齢は、すべて20歳以上であった。

(3) 後天性免疫不全症候群

18件の届出があり、前年の16件から増加した。このうち、エイズ患者、HIV感染者がそれぞれ9件であった。

性別では、男性が17件とほとんどを占めていた。年齢別にみると、20歳代から40歳代が11件と61%を占め、60歳代以上が6件と33%を占めていた。感染経路は、性行為によるものが16件とほとんどを占めており、同性間が12件、異性間が4件であった。

2 定点把握対象五類感染症

(1) 週単位報告疾患

インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点および基幹定点から毎週報告される18疾患の報告数を表2に示した。年間の定点当たり累積報告数は、感染性胃腸炎の411人が最も多く、続いてインフルエンザ184人、水痘61.9人、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎58.1人、ヘルパンギーナ26.5人、マイコプラズマ肺炎25.9人、RSウイルス感染症25.6人、突発性発しん25.5人、流行性角結膜炎23.8人、咽頭結膜熱13.9人、流行性耳下腺炎12.3人などとなっている。年間の推移に特徴が認められたインフルエンザ、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナおよびRSウイルス感染症について、広島市と全国における週別の定点当たり報告数の推移を図に示した。

a インフルエンザ

年間の定点当たり累積報告数は184人で、前年の322人と比べ前年比0.57と減少した。

2011/12シーズンは、2011年第48週に定点当たり1.54人と流行期に入った。その後2012年第3週から急増し、第5週に定点当たり29.0人のピークとなり第6週もほぼ同程度で推移した。その後は大きく減少し、流行末期の第15週から16週にかけて再び増加したが、第18週には定点当たり0.67人とほぼ終息状態となった。

b 感染性胃腸炎

年間の定点当たり累積報告数は411人で、前年の309人と比べ前年比1.33とやや増加した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の62.9%を占め、小児科定点報告対象疾患の中で最も多かった。

年初から増加傾向で推移し、第8週に定点当たり13.9人のピークを迎えた後はやや減少したが、4月中旬から再び増加した。5月以降は減少傾向となり、7月～10月は低い水準であった。11月から再び増加が始まり、特に11月下旬から急増し、第50週

に定点当たり27.3人のピークを迎えた後減少した。

c ヘルパンギーナ

年間の定点当たり累積報告数は26.5人で、前年の23.8人と比べ前年比1.11とやや増加した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の4.1%で、小児科定点報告対象疾患のうち4番目に多かった。

4月下旬より増加が始まり、第28、29週に定点当たり3.00人のピークを迎えた。以後は減少し、第42週に定点当たり1人未満となりほぼ終息した。

d RSウイルス感染症

年間の定点当たり累積報告数は25.6人で、前年の17.1人と比べ前年比1.50と増加した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の3.9%で、小児科定点報告対象疾患のうち5番目に多かった。

2011年第51週に定点当たり2.13人のピークを迎えた後、2012年1月以降は減少し、3月～7月にかけては低いレベルで推移した。例年より3か月早く8月頃から増加傾向となり、第41週に定点当たり1.54人のピークを迎え、その後は減少した。しかし11月中旬に再び増加し、第46週に定点当たり1.29人となった後また減少した。2012年は全国的にも増加が始まる時期が早く、冬季にピークがみられる例年の傾向とは異なる推移を示した。

(2) 月単位報告疾患

月単位で報告される定点把握五類感染症(性感染症定点から報告される性感染症4疾患および基幹定点から報告される薬剤耐性菌感染症4疾患)の報告数を表3に示した。

a 性感染症

性感染症4疾患のうち、年間の定点当たり累積報告数が最も多かったものは、性器クラミジア感染症の35.6人で、次いで淋菌感染症の15.3人であった。性器ヘルペスウイルス感染症と尖圭コンジローマを加えた性感染症4疾患の総数は、前年比0.97と同程度であった。

b 薬剤耐性菌感染症

年間の定点当たり累積報告数は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が71.4人と最も多く、次いでペニシリン耐性肺炎球菌感染症2.29人、薬剤耐性緑膿菌感染症0.98人の順であった。薬剤耐性アシネトバクター感染症は年間を通して報告がなかった。薬剤耐性菌感染症4疾患の総数は、前年比0.90とやや減少した。

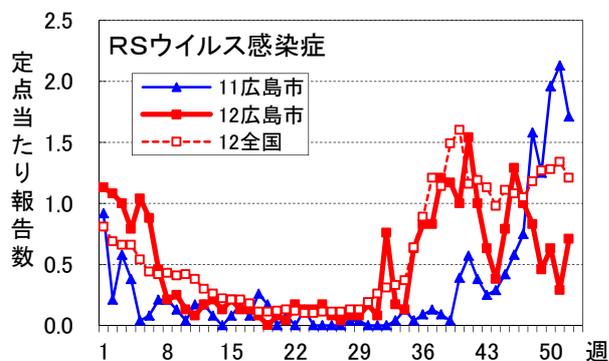
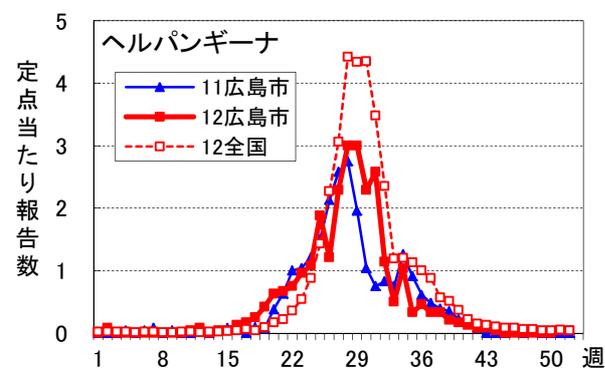
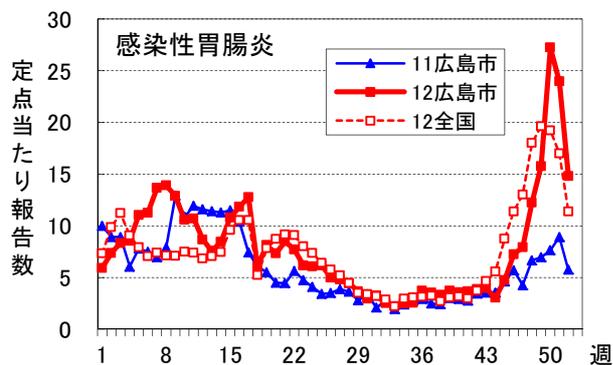
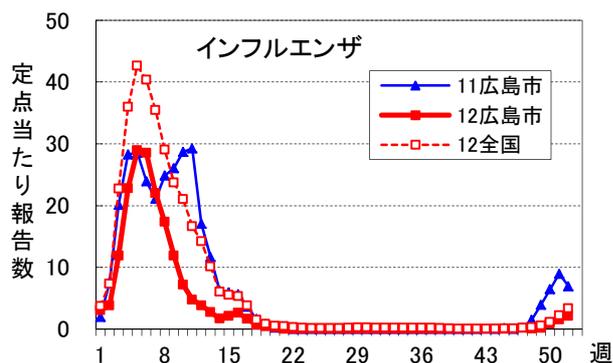


図 定点当たり報告数の週別推移

表 2 定点把握対象五類感染症患者報告数
(週単位報告分) (2012年)

疾患名	報告数
インフルエンザ	6,772 (184)
咽頭結膜熱	330 (13.9)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,390 (58.1)
感染性胃腸炎	9,836 (411)
水痘	1,481 (61.9)
手足口病	95 (3.99)
伝染性紅斑	172 (7.19)
突発性発しん	608 (25.5)
百日咳	170 (7.10)
ヘルパンギーナ	633 (26.5)
流行性耳下腺炎	294 (12.3)
RSウイルス感染症	612 (25.6)
急性出血性結膜炎	14 (1.80)
流行性角結膜炎	189 (23.8)
細菌性髄膜炎	5 (0.70)
無菌性髄膜炎	17 (2.42)
マイコプラズマ肺炎	181 (25.9)
クラミジア肺炎	1 (0.14)

()内は定点当たり累積報告数

表 3 定点把握対象五類感染症患者報告数
(月単位報告分) (2012年)

疾患名	報告数
性器クラミジア感染症	320 (35.6)
性器ヘルペスウイルス感染症	108 (12.0)
尖圭コンジローマ	73 (8.12)
淋菌感染症	138 (15.3)
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	500 (71.4)
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	16 (2.29)
薬剤耐性アシネトバクター感染症	0 (0.00)
薬剤耐性緑膿菌感染症	7 (0.98)

()内は定点当たり累積報告数